



瓦の拓本づくり

元をおこなう 整理作業員の方が6名、遺物の実測やデータベースの作成などをおこなう 派遣職員の方が4名いて、調査研究活動をサポートしていただいています。

つぎに考古第三調査室の仕事の内容について紹介します。当調査室では、研究所発足以来の仕事を引き継ぎ、軒を飾る瓦の文様を分類し、同一系統の文様に同一の番号をつけ、文様の範(木型)ごとにA・B・Cなどのアルファベットをつけ記号化するなど、常に先進的な試みをおこなってきました。その結果、現在までに確認している奈良時代の範の種類はおよそ650種類にも達します。そしてその成果にもとづき、奈良時代の瓦の年代細分などを中心に研究を進めています。今後は、範傷の進行や彫り直しなどを、すべての種類の範で詳しく調べ、より細かなタイム・スケールを作ることが課題となっています。

1990年以前は軒瓦の研究が中心でしたが、現在では軒瓦以外の丸瓦や平瓦についても、出土数のカウントや重量の計測もおこない、より総合的な瓦研究のための基礎資料の作成もおこなっています。このほか遺跡出土軒瓦のデータベース化も1980年代前半から進めており、現在の登録資料は7万点を超えます。そのうち約5万件の資料については画像のデータ化も終了し、今後、ホームページを通して一般の方にも公開していく予定です。

考古第三調査室(平城宮跡発掘調査部)

奈良文化財研究所による発掘調査は、宮殿や寺院を対象とすることが多いので、出土遺物としては圧倒的に瓦が多くなります。そのため研究所の発足当初から、瓦の研究は、重要な仕事として位置づけられてきました。その中で、今の考古第三調査室は、瓦を研究する専門の部屋として1970年に誕生しました。現在、考古第三調査室には4人の研究員が所属しています。それ以外にも出土した瓦の洗浄や復